

# 令和4年度 学生自主カリキュラム報告書



和歌山県立医科大学

## 令和4年度 学生自主カリキュラム報告書によせて

学生部長 中田 正範

令和4年度学生自主カリキュラム報告集が刊行されました。

コロナ禍で制限されてきた学生自主カリキュラムも、本年度は初めて医学部、保健看護学部、薬学部の学生が参加して行われました。本制度は、学生諸君達が自主的にカリキュラム内容を決定し、研究、調査、研修などの活動を行うものです。本学での様々な教育活動に加え、学生達の探求心を育む重要な機会と存じます。

医学部からは、沖縄戦戦没者遺骨収集について興味あるレポートがまとまっています。保健看護学部からは、先輩保健師の活動を通じた地域医療に関して詳細な活動報告が集まりました。また、三学部生が参加した南海トラフを意識した防災に関する地域と連携した活動報告もあります。

これらの報告書や活動を通じて各々のカリキュラムについて、さらなるコラボレーションの可能性や人的繋がりが出てくることを祈っております。またこの経験は今後活動される医療人としての人生に有益であることは間違いないと考えております。

最後に、カリキュラムに御協力、御指導いただきました、教員、事務、関係の皆様へ深謝申し上げます。

# 目 次

令和4年度学生自主カリキュラム報告書によせて

学生部長 中田 正範

「沖縄戦戦没者遺骨収集」を担当して・・・・・・・・・・・・・・・・・・A  
法医学講座 近藤 稔和

「三葛地域の防災力向上に向けた活動及びその活動の効果の検証」を担当して・・・・・・・・A  
保健看護学部 岡本 光代

「へき地における子育て支援と高齢者福祉について学ぶ」を担当して・・・・・・・・・・B  
保健看護学部 岡本 光代

1, 沖縄戦戦没者遺骨収集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1  
医学部 4年生 安田 啓喜  
2年生 小鮎 亜裕美

2, 三葛地域の防災力向上に向けた活動及びその活動の効果の検証・・・・・・・・・・5  
医学部 3年生 山崎 稜大 山本 明日美  
1年生 谷口 茉理  
保健看護学部 2年生 井田 有美 阿部 朱里  
1年生 西崎 優花 重黒木 瞳 小園 愛実 藤本 壮太郎 山上 皓大  
薬学部 1年生 大曾根 里桜

3, へき地における子育て支援と高齢者福祉について学ぶ・・・・・・・・・・12  
保健看護学部 2年生 赤松 瑞葵 阿部 朱里 井田 有美

## 「沖縄戦戦没者遺骨収集」を担当して

法医学講座 近藤 稔和

沖縄における戦没者の遺骨収集事業に私自身が携わるようになって5年になる。8月半ば(毎年この時期に実施)の沖縄県は、ガマ(洞窟)の中で陽の光は遮られているものの、沖縄独特の高温多湿という過酷な条件であり、長袖・長ズボン・ゴム長靴に身をまとった状態での遺骨収集は体力の消耗が著しいことは明白である。そのような状況で懸命に泥まみれになりながら土壌の中から細かな骨の断片を見つけては、一つ一つ丁寧に人体のどの部位の骨であるのかを、未だ医学的知識は少ないながらも、解剖学・骨学で学んだ知識をフルに活かしながら識別に取り組む姿は印象的であった。夕方からは、場所を変えて識別した骨の断片から、その場所にどのような人たちが生活していたのかを法医学・法歯学の先生方とともに議論することで、決して講義室では経験できない 生きた「実践医学」を肌で感じていたことは間違いない。また、遺骨収集作業を通じて、当時の沖縄の人々がどのような思いで日々の暮らしていたのかを多少なりと考えることができ、戦争の悲惨さと平和であることの大切さをも実感していたことと思える。

将来医療人になるものとしての心構えだけではなく、1人の人間として成長する中で大切なことを学べたであろう。

## 「三葛地域の防災力向上に向けた活動及びその活動の効果の検証」を担当して

保健看護学部 岡本 光代

三葛キャンパスのある地域は、南海トラフ巨大地震による被害を受ける可能性が70～80%と高く、防災対策が喫緊の課題です。一方、三葛地区は高齢化が進んでいることに加えて、新型コロナウイルス感染症の拡大により、地域の防災活動は停滞しています。そこで、災害ボランティアサークル Will のメンバーを中心に、3学部の学生が一体となって三葛地域の防災力を高めるべく活動を開始。第1弾は、学生を対象としたアンケート調査の結果をもとにパンフレットを作成し、学生の防災意識が高まるよう啓発されました。これまで Will は、東日本大震災後の被災地を訪問し、傾聴活動を継続して行っています。この活動経験を活かして、身近な地域の防災に取り組んでくれたことは大変意義のあることです。特に、発災直後の避難行動によって多くの命を守ることができるよう、日頃から備えておくことが重要です。今後は、地域住民を巻き込み、大学と

も連携し、学生、教職員が一丸となって防災対策に発展することを期待しています。

現在、医療現場においては、多種多様な医療スタッフが連携、補完し合い、チーム医療によって質の高い医療を提供することが求められています。学生のうちから他学部の学生と協働することは、チーム医療だけでなく大規模災害医療の実践にも役立つことを確信しています。3 学部合同で取り組む活動のきっかけとして自主カリキュラムを大いに活用していただきたいです。

### 「へき地における子育て支援と高齢者福祉について学ぶ」を担当して

保健看護学部 岡本 光代

今回訪れたへき地は和歌山県北山村。人口約 400 人の村民を対象に、2 名の保健師が活動しています。そのうちの 1 人が、自主カリキュラムをきっかけに北山村に就職した先輩保健師です。特別講義に招聘したところ、大変楽しそうに北山村での保健活動を語ってくださいました。学生はその先輩のキラキラした姿に魅かれ、間近で見たい！と、今回の自主カリキュラム申請に至りました。北山村では、フィールドワークや住民や関係者へのインタビューを通して、人口減少の過疎地域ではありますが、人々の繋がりによって互いに支え合い、暮らしや健康を守っているという強みを捉えることができました。一方、医療や福祉の資源が限られているため、住民一人一人の健康意識が高まるよう予防の観点からの保健活動が重要であることが大きな学びとなっていました。また、保健師の活動だけでなく、診療所や社会福祉協議会、保育所や小学校など医療や福祉、教育との連携のなかで、すべての住民の暮らしと健康を支えていく体制づくりは、今後の地域医療のモデルとなるものです。将来、看護職として、人を見る視点や姿勢、地域連携のあり方を学び、先輩の姿から自らどのような看護職となって活動できるかを考えるきっかけになりました。本カリキュラムを通して学んだ学生が、へき地の保健師活動に関心をもち、北山村の保健師や看護師のように、住民の皆様から信頼される看護職となってくれることを期待しています。

学生自主カリキュラムの実施にあたり、多大なるご支援、ご協力を賜りました、北山村の住民の皆様、保健師様をはじめ役場の皆様、診療所の皆様に厚くお礼申し上げます。

# 沖縄戦戦没者遺骨収集

和歌山県立医科大学 医学部

4年生 安田啓喜

2年生 小鮎亜裕美

指導教員 近藤稔和

## 目的

本学法医学教室は、日本で最初に沖縄戦戦没者遺骨収集活動に参加し、今年で5年目を迎える。この戦没者遺骨収集の最終目的は、個人を特定することにある。このような白骨遺体の鑑定はまさしく、法医学の専門分野のひとつである。白骨遺体からは個人識別のための形態学的鑑定や、DNA 鑑定が可能となる。具体的な個人識別については、白骨の特徴から性別、年齢、身長等を推定し、さらには白骨とともに発見される歯牙や遺留品などから、当時の状況も踏まえて判断することとなる。

MD-PhD に所属する我々は、すでに骨学実習で学んだ知識と、法医学で現在学んでいる個人識別の方法に基づいて、実際現地を訪れてこの収集活動を体験することにより、法医学的に重要な実務の一部である白骨遺体の鑑定について、学びを深めうると考える。さらに、場合によっては戦没者のご遺族たちの対話会に参加することにより、医学的な観点だけでなく、医療人としての心構えも身につけることができると考える。

また、我々は、実際に白骨遺体の解剖に参加し、四肢骨や頭蓋骨、骨盤の長さや角度を計測することで、身長推定や性別推定が可能となることを経験済みである。

## 方法

令和4年8月10日から11日にかけて、沖縄県糸満市荒崎海岸付近のガマ(沖縄の方言で自然洞窟という意味)にて遺骨収集をおこなった。長年の風化により、遺骨は表土から10cm以上掘り進めることが必要となるので、手やスコップを用いて遺骨を傷つけないように慎重に作業をおこなった。

## 結果

今回活動をおこなったガマは、小道のように長く狭い空間が続き、大人が腰をかがめないと立つことができないほどの高さであった(写真1・2)。日光は遮断され、気温こそ高くないものの、何十人も人が敵の攻撃から逃れるためにその場で身を潜めていたことを考えると、空気が薄くなり、呼吸が苦しくなるような感じがした。



写真1. 遺骨収集をおこなったガマの入口の様子。



写真2. 遺骨収集をおこなったガマの内部の様子。

実際に収集された遺骨として、写真3は14歳から16歳と推定される人物の上腕骨である。これは骨端線の様子から年齢推定をすることができた。また、成人の大腿骨（写真4）や環椎（写真5）なども発見された。写真6は胎児の長管骨である。その大きさは獣骨と似ているが、形態的な違いから区別することができた。さらには、特徴的な所見がなく、DNA鑑定不能な遺骨も多数発見された（写真7）。

その他に、当時の人々が使用していたと考えられるかんざしや櫛なども発見され（写真8）、これらはDNA鑑定と合わせて、個人の特定に繋がりと考えられる。



写真3. 上腕骨(14から16歳と推定)。(日本法医病理学会から提供)





写真4. 大腿骨(成人)。(日本法医病理学会から提供)



写真5. 環椎(第1頸椎)の一部。(日本法医病理学会から提供)



写真6. 胎児の長管骨。  
(日本法医病理学会から提供)



写真7. 不明骨。  
(日本法医病理学会から提供)



写真8. 遺留品。(日本法医病理学会から提供)



## 結論

今回の活動では、明らかな形態的な違いから少なくとも3人が発見されたことがわかる。また、法歯学の先生方による歯牙鑑定も現地で実施され、さらなる人数の特定に繋げることができた。

実際に現地を訪れると、戦争から75年以上経過した現在においても沖縄戦戦没者の遺骨が、至るところに多数残されていることがわかった。学内で学んだ知識を実際に活用しながらこの活動に取り組むことができただけでなく、その場所に訪れて五感で感じることにより、医療人としての将来に活かすことを学ぶことができたと考える。

## 三葛地域の防災力向上に向けた活動及びその活動の効果の検証

和歌山県立医科大学 医学部

3年生 山崎稔大 山本明日美

1年生 谷口茉理

保健看護学部

2年生 井田有美 阿部朱里

1年生 西崎優花 重黒木瞳 小園愛実 藤本壮太郎 山上皓大

薬学部

1年生 大曾根里桜

指導教員 保健看護学部 岡本光代

### 目的

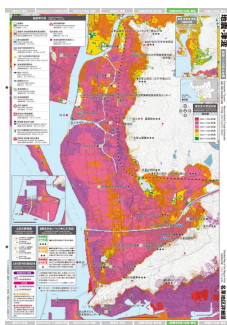
和歌山県の発表によると、令和4年4月1日時点で、今後30年以内に南海トラフでマグニチュード8～9の地震が発生する確率は70～80%とされている。三葛キャンパスを含む三葛地域は、東海・東南海・南海三連動地震が発生した際は、震度6弱の揺れと最大1mの津波が、最悪想定である南海トラフ巨大地震が発生した際は震度6強の揺れと2m以上の津波が襲来すると推測されている。

このような背景を受け、私たちは地震・津波に対する「防災」や将来に向けて災害医療について学び、得た知識を学生や地域に還元し、三葛地域の防災力を高めると共に、将来大地震が発生したときに助け合える「顔の見えた関係」作りを目的に、本活動を実施した。

### 方法

医学部および保健看護学部の1～3年生10名が活動に参加した。活動期間は、令和4年8月～令和5年3月であった。

学生間で内閣府や和歌山県などの行政ホームページ、論文などを用いて学習し、情報交換を行った。また、三葛地域のフィールドワークや三葛地域の自治会長に防災に関するヒアリング調査を実施した。さらに、三葛キャンパスに通う大学生を対象に、防災意識や知識を問うアンケート調査を実施した。学習の成果として、三葛地域の防災パンフレットを作成した。



名草地区のハザードマップ(和歌山市 HP より)

## 結果

### 1. 三葛地域のフィールドワーク

令和4年9月2日、三葛キャンパスから避難場所であるNTT社宅前までのフィールドワークを行った。春に通った際には溜まっていた落ち葉が掃除されていたが、雑草が生い茂っており歩きにくい場所がいくつかあった。また、街灯が少なかったことから夜間の避難はより危険な場所が多くなると予想した。山道を登る途中柵がない崖に面した場所もあった。険しい方の道では落ち葉が溜まっていたのに加えて階段が急であったので、歩きづらかった。山道や高い石の塀は地震発生時に崩れる可能性があると感じた。NTT社宅前の避難場所に到着すると開けた場所があったが、日光を遮るものがなく長時間いるには暑かった。この避難場所は道路の一角であることから縦に長く、途中車が通ることもあった。災害時に備えた物資などが保管されている場所はわからなかった。また、道中で見られた避難場所への誘導パネルや海拔を示す看板の所在も調べた。目的地を知っていたので迷うことはなかったが、木の陰になっていて少し見えづらくなっていた看板もあった。



三葛キャンパスからNTT社宅前までにある避難場所への誘導パネル

令和4年11月4日、三葛地区の自治会長にヒアリング調査を実施した。災害時に不安なこととして災害発生時に通る可能性のある道の狭さや、高い塀が倒れたときに避難が遅れてしまうことなどがあった。他にも三葛地域で開催する予定の炊き出し訓練についても教えてもらった。以前Wakayama Willの活動の一環で設置した避難場所への誘導パネルは非常に役立っていると仰っていた。

### 2. 三葛キャンパスの学生へのアンケート調査

令和4年11月、三葛キャンパスに通う大学生(保健看護学部1~4年生と医学部1年生)を対象に、Googleフォームを用いたアンケート調査を実施した。保健看護学部1年生24名、保健看護学部2年生32名、保健看護学部4年生10名、医学部1年生6名の合計72名(回収率17.1%)から回答を得られた。

「津波から逃げる際の避難経路は知っていますか」では、「はい」が59名(82%)、「いいえ」が13名(18%)であった。

「被災後に想定している行動を教えてください」では、「帰宅手段がないため、一度避難

所へ行く」が最も多く 41 名 (57%)、「特に考えたことがない」が 15 名 (21%)、「家(下宿先)が津波に流されるので、避難所へ行く」が 10 名 (14%)、「帰宅可能なので徒歩で帰る」が 5 名 (7%)、紀三井寺に登るが 1 名 (1%) であった。

「紀三井寺・三葛周辺の避難所がどこか知っていますか」では、「はい」が 39 名 (54%) で「いいえ」が 33 名 (46%) であった。

「三葛周辺のハザードマップをみたことはありますか」では、「はい」が 26 名 (36%)、「いいえ」が 46 名 (64%) であった。

「大学の防災マニュアルをみたことはありますか」では、「読んだことがある」が 12 名 (17%)、「あることは知っているが、読んだことはない」が 24 名 (33%)、「全く知らない」が 36 名 (50%) と最も多かった。

「大学の防災物資保管場所を知っていますか」では、「はい」が 4 名 (6%)、「場所は知らない」が 53 名 (74%)、「物資があることを知らなかった」が 15 名 (21%) であった。

「和歌山防災ナビ(アプリ)を入れていますか」では、「はい」が 9 名 (13%)、「いいえ」が 63 名 (87%) であった。

「今後 Wakayama Will が避難訓練などの防災活動を企画した場合、参加しますか」では、「はい」が 31 名 (48%)、「いいえ」が 34 名 (52%) であった。

「防災のために行っていることはありますか」という複数選択回答では、「家に非常食を用意している」が最も多く 37 名 (64%)、「家に持ち出し袋がある」が 27 名 (47%)、「家の家具が固定されている」が 17 名 (29%)、「家族との連絡方法が決まっている」が 12 名 (21%)、「家族で集合場所が決まっている」が 11 名 (19%) であった。

「今防災に関して不安に思っていることがあれば教えてください」という自由記述では、「避難経路は知っているが、地震の際安全ではないと思う。もう少し整備してほしい」「一人暮らしで知り合いが少ないので避難した後寂しい」「津波が発生した場合、三葛にはどのくらいの時間で津波が来るのか知りたい」「和歌山市のハザードマップ等を見たことはあるが、いまいわかりにくかった」などの意見があった。

### 3. パンフレット作成

今回の活動の成果として、パンフレットを 500 部作成した。今後、三葛キャンパスに通う保健看護学部 1~4 年生、医学部新 1 年生に配布する予定である。また、三葛地区の自治会長を通じて地域住民にも配布しようと考えている。

作成したパンフレットのコンテンツは以下のとおりである。

#### ① 知っておきたい知識

##### A. 和歌山という地域

県外から和歌山県立医科大学に進学している学生も多いことから、まずは和歌山という地域の特性を記載した。

B. 南海トラフ地震とは

南海トラフ地震については現在も多くの機関が研究・調査しており、被害想定や発生確率などについては多くの説がある。今回のパンフレットでは、和歌山県の「地震・津波災害対策計画」から最悪想定である「南海トラフ巨大地震」の想定をもとに予想される被害を記載した。

② 大地震が起きるとどうなるの？

A. まず取るべき行動！

地震発生時に最も重要な行動である「自分の身の安全を守る行動をとる」ことについて記載した。また、地震の揺れが落ち着いた後は津波の可能性を考えて安全な避難場所へ移動することについても言及した。

B. ハザードマップを見ておこう！

和歌山市 HP より、名草地域の地震・津波ハザードマップを引用した。これにより自身の居住地やキャンパス、通学路の災害時の危険性を知れるものとした。また、他にも三葛キャンパスや紀三井寺駅内に掲示されている避難場所への誘導パネルの写真も記載した。

C. 避難所ってどこ？

避難所と避難場所の違いについて言及した後、三葛地域にある避難所及び避難場所を記載し、そこまでの避難経路を紹介した。

D. 避難生活ってどんなの？

地震が発生してから少し時間が経つと避難生活が開始する。体育館のような場所での避難生活には様々な困りごとがある。ここでは「プライバシー」「精神疾患」「食生活」「トイレ」の4つについて困りごとを分類したほか、避難訓練時の写真を記載することで、実際の避難生活時をイメージできるようにした。

E. 復興までの流れ

「発災直後(発災～6時間)」「超急性期(6～72時間)」「急性期・亜急性期(72時間～1か月)」「慢性期(1～3か月)」「中長期(3か月以降)」の5つのフェーズに分けて復興までの流れを記載した。また東日本大震災の事例と南海トラフ地震(最悪想定)の比較を行うことで、南海トラフ地震の被害の甚大さに気づけるようにした。

F. 各種団体の動き

大災害が発生すると行政だけでなく、社会福祉協議会やボランティア、自治会、消防団、NPOなどの地域全体での活動が始まる。また、和医大や日赤病院などの医療機関を巻き込んで全国からの支援も行われる。それらを簡略的に図式化し記載した。



③ もしも〇〇にいる時に、地震が起きたら？

A. 大学にいる時

和医大三葛キャンパスの防災マニュアルをもとに、地震発生からの教職員と学生の避難の流れをフローチャートで示した。また、ロッカーに備えておくべきものや、避難時に注意すべき「エレベーターは使用しない」「落下物に注意し、頭を守る」「一度避難したら、建物の中には入らない」の3点についても記載した。

B. 電車にいる時

今回実施したアンケートでは、三葛キャンパスに通う大学生のうち約58%が電車通学をしていると分かった。中には長時間かけて通学をしている学生もおり、その通学時間中に災害が発生する可能性もある。そこで和歌山大学の鉄道防災教育・地域学習列車「鉄學」の活動を参考に、地震発生時に電車内にいた際の行動指針を記載した。

C. 自宅にいる時

発生直後から自宅を出るまで、そして避難しているときの注意点を記載した。また、災害時のために自宅で備えておくべき物資なども記載した。

## 考察

三葛地区のフィールドワークを通して、避難経路の整備が必要であると考えた。街灯が少ないことから夜間に地震が発生し、地域住民が狭い通路に押し寄せることにより怪我や立往生をしてしまう可能性が非常に高いと考えた。これは転落防止の柵がないことや階段が急であることも要因になると考えられる。また避難場所であるNTT社宅前については、この場所は避難所ではなくあくまで避難場所なので、長期間の生活を送る場所ではなく、地震・津波から身を守るための一時的な集合場所である。このことから避難生活用の物資等は備蓄する優先度は低いかもしれない。しかしこの避難場所は道路の一角であり、雨風をしのぐ壁や屋根はなくコンクリートの地面があるだけである。また車が常時通る可能性があることから、ゆっくり落ち着いて過ごすことは困難ではないかと考えた。さらに大地震発生時には三葛地区の地域住民に加えて、三葛キャンパスにいる学生も押し寄せ、大変混雑する可能性もあることから、NTT社宅前の避難場所の整備は必要であると考えた。

三葛地区の自治会長さんへのヒアリングを通して、三葛地区では地震災害に備えた防災対策を定期的に行っていると知った。しかしそれらに三葛キャンパスに通う大学生は参画できていない。また大地震が発生した時の不安事として、もし塀などが倒れてしまった際は狭い道を通って避難することが困難な住民がいるかもしれないということが挙げていただいた。これらの現状から、三葛キャンパスに通う大学生は三葛地区の防災活動に参画していく必要があると考えた。これは平常時より三葛キャンパスに通う大学生がより三葛地区を防災の視点から見ることで、災害発生時に自身の身を守る行動ができるというメリットがある。また、平時より大学生が地域住民と顔の見える関係を築いておくことで、災害発生時

に大学生が地域住民の方の避難のお手伝いや呼びかけを行いやすいというメリットもあると考えた。

三葛キャンパスに通う大学生に行ったアンケートの結果で、「津波から逃げる際の避難経路を知っていますか」という問いに対して、82%の学生が「はい」と答えたのに対して、三葛キャンパス周辺の避難所の場所を知っているのは54%、ハザードマップを見たことがある人は全体の36%と低値であった。この結果から、大学生はある程度の防災意識を持っているが、実際に避難所の場所を調べることや、ハザードマップを見るという行動を起こすことができている者が多いのではないかと考えた。災害はいつ起こるかわからないことから、防災意識を高く長く保つのは非常に困難である。そのため、今回作成した防災パンフレットは、防災について学ぶための資料としての役割だけでなく、保存版として学生の手元に残ることで、防災意識を長く保つための一助となると考える。

今後、パンフレットを配布した後の学生の意識や行動への影響を検証する予定である。その結果から見えてきた課題をもとに、今後の活動に活かしていきたい。

今回作成したパンフレットは、三葛地域を取り巻く防災に関する知識や地震災害における適切な行動や備えをまとめたものとなったが、学生や地域住民の声やニーズを十分に反映したものとはならなかった。今後は学生だけでなく地域住民を巻き込んだニーズ調査を行い、実際に必要とされているアクションを起こしていく必要がある。さらに、大学で実施している防災対策とも連携し、大学生が主体となった防災活動を実施していく必要がある。

## 最後に

今回作成したパンフレットは、ある程度防災意識はあるが実際に自分で調べたり行動に移したりはできていない人にとっては、正しい情報や適切な行動を知る手段として有用であると予想される。それを検証するためにパンフレット配布後のアンケートを行う必要がある。地震発生時に自分の身を守り、他人を救うことができる人を増やすために、学生が地域に入り込むことで地域住民を巻き込んだアクションを起こしていくことが今後の課題である。

## 謝辞

三葛地域のことや現在なされている防災対策について教えてくださり、私たちにできることを一緒に考えてくださった三葛自治会長の辻本様に感謝の意を表します。加えて、パンフレットを制作してくれた大学生、アンケートに答えてくれた大学生に感謝申し上げます。

## 参考文献

- ・和歌山県公式観光サイト. “和歌山エリアガイド 和歌山県について”. 和歌山県観光連盟. 2023.  
<https://www.wakayama-kanko.or.jp/destinations/about-wakayama/>
- ・和歌山県地震・津波災害対策計画編. “地震・津波災害対策計画編”. 和歌山県. 2023  
[https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/011400/d00153903\\_d/fil/01\\_jishin\\_1.pdf](https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/011400/d00153903_d/fil/01_jishin_1.pdf)
- ・NHK. “災害列島 命を守る情報サイト”. NHK. 2023  
[https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/basic-knowledge/basic-knowledge\\_20190711\\_09.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/basic-knowledge/basic-knowledge_20190711_09.html)
- ・内閣官房内閣広報室. “津波では、どのような災害が起こるのか”. 首相官邸. 2023  
<https://www.kantei.go.jp/jp/headline/bousai/tsunami.html>
- ・NHK. “NHK アーカイブス”. NHK. 2023  
<https://www.nhk.or.jp/archives/saigai/>
- ・鉄道防災教育・地域学習列車-鉄學-. “津波被害ゼロを目指して”. 鉄道防災教育・地域学習列車-鉄學-. 2023  
<http://tetsugaku-train.com/>

# へき地における子育て支援と高齢者福祉について学ぶ

和歌山県立医科大学 保健看護学部 2年生

赤松 瑞葵 阿部 朱里 井田 有美

指導教員 岡本 光代

## 1. はじめに

へき地では医療福祉資源が不足していたり、交通の便が悪かったりするという特徴がある。そのため、健康を維持するという人々の意識を高め、適切な保健行動につながるように働きかけるなど、予防的意義の高い活動が重要となる。現在北山村では約400人の村民に対し、2名の保健師が公衆衛生看護の専門職として活動している。住民と保健師との距離が近いこと、住民の生活や健康の変化に気づきやすく、すぐに支援を行うことができる。また、小規模な村であるため、地域の状況に応じて柔軟に対応できることが村の保健師活動の強みである。一方、保健医療福祉資源が不足しているため、高齢者が疾病や障害を抱え、さらに要介護状態になった場合、当該地域に住み続けることが困難となる。よって、介護予防は特に重要である。また、へき地では子どもの人数が少なく、母親が孤立しやすい。さらに、母子保健や子育て支援のサービスを提供できる専門的な施設や関係者も少ないため、保健師による関わりが重要である。以上のことから、北山村での保健師の活動に関心を持ち、へき地の子育て支援や高齢者福祉について学びたいと考えた。

## 2. 目的・目標

### <目的>

へき地での地域特性に応じた保健活動の実際を学び、医療福祉資源が不足する中で子育て支援や高齢者福祉のサービス提供のあり方や、へき地での医療福祉の課題解決のために看護職ができることを考える。

### <目標>

- ①北山村の地域特性に合わせた保健活動と予防的意義について学ぶ。
- ②子育て支援や高齢者福祉の実際を知ると共に、へき地の看護師・保健師が地域において、実際にどのような役割を担っているか学ぶ。
- ③子育て世代や高齢者へのインタビューを通して健康や生活の実態を捉える。
- ④診療所を訪問し、へき地医療を担う診療所の役割機能とへき地医療の課題を学ぶ。

## 3. 実施期間

日時：令和4年7月28日(木)～7月30日(土)

場所：和歌山県東牟婁郡北山村

北山村役場、国保北山村診療所、北山村社会福祉協議会、北山村生活支援ハウス、じゃばらハウス等

## 4. タイムスケジュール

一日目

13:00～ 国保北山村診療所見学、看護師インタビュー

- 14:00～ 社会福祉協議会デイサービス見学
- 14:30～ 乳幼児家庭訪問同行、母親へのインタビュー
- 15:30～ じゃばらはうす見学
- 16:00～ 振り返り
- 17:00～ 村内地区踏査

## 二日目

- 8:00～ 保健師インタビュー
- 9:30～ 社会福祉協議会シニアエクササイズ参加
- 13:00～ 小学校高血圧健康教室参加
- 16:00～ 村内地区踏査

## 三日目

- 9:00～ 村内地区踏査

## 5. 学んだこと

- ・北山村の特徴について

北山村の人口：402人、面積：48.20km<sup>2</sup>、年間出生数：3人、高齢化率：44.9%（令和3年）

北山村役場の職員数：23名、うち医療・保健活動を担う専門職：保健師2名、理学療法士1名

北山村には、小松、下尾井、大沼、竹原、七色と5つの地区がある。地区同士が離れており、車なしで移動することは難しい。地区によって田んぼが多い所やコンクリートが多いところ、日当たりの良し悪しなど、環境に違いがある。大沼地区に中心となる役場や診療所などが集まっているため、人口の約4割が大沼地区に集中している。その一方で、1番奥に位置する小松地区は交通の便が悪いため、現在は住民が住んでいないという。竹原地区よりも七色地区の方が日当たりが良く、子どもが多いという特徴がある。保健師は地区の特色に基づいた対応というより、その人ごとの支援を行っている。

北山村住民の健康意識を示す指標として、村民の特定健診の受診率の高さが挙げられる。北山村の特定健診受診率は60%を超える年もあり、全国平均を大きく上回り、和歌山県内では1位となっている。保健師は道で遭遇した村民に健診の予定を知らせたり、予約が入っていない村民に電話をかけて受診を勧めたりするなどの活動を行っており、このことが北山村の高い受診率に貢献していると考えられる。また、北山村には自宅での日常生活に不安がある村民が入居できる生活支援ハウスがあるが、要介護度が重くなると村外の施設に移らなければならない。できるだけ長く北山村で過ごしたいという村民の思いも、健康意識の向上の一因になっていると考えられる。



47 都道府県の地図より (<https://uub.jp/map/wakayama/>)

図 1 北山村の所在地



・国保北山村診療所見学、看護師インタビュー

診療所の体制は医師1名、看護師2名で、患者数は1日約18名診療している。看護師は診療の補助だけでなく、診療所の受付や薬の説明、訪問看護などさまざまな役割を果たす。さらに北山村には薬剤師がいないため、看護師が調剤などを行うことも特徴である。また、診療所に隣接されている生活支援ハウス入居者のバイタルサイン測定も行っている。

北山村は高齢化が進行しており、認知症患者も多くなっている。薬の管理が難しい村民に対しては、薬を一包化したり、カレンダー(写真1)に薬を貼り付けたりするなど、服用すべき薬が一目でわかるように工夫している。また、隣接しているデイサービスとも連携し、デイサービスに薬のカレンダーを持参してもらい、正しく服薬できているか確認している。また、正しく服用してもらうため、1ヶ月分を処方するのではなく、一週間分を毎週処方するなどの工夫を行っている。しかし、なかには薬を飲んだふりをする高齢者もいる。さまざまな工夫を行っているが、カレンダーにするまでの対処が限界だという。直接飲ませる際、薬を飲むことを嫌がる人には錠剤を細かく砕いたり、はちみつに混ぜたりするなどの工夫を行う。さらに、事前に会話をして機嫌をよくしてから薬を飲ませるなどの対応を行うことがある。このように、高齢者と関わる機会が多いため、介護の知識や技術、工夫も大切である。



写真1 薬のカレンダー

看護師は事故にも対応する。今までに火傷や低温火傷、溺水、蜂に刺された人にも対応したという。北山村に救急車が到着するためには30分程度必要となる。救急車を待つ間に患者が急変した場合、医師の指示がないと看護師は処置を行うことができない。患者が急変した際の不安が大きいため、ナースプラクティショナーの導入を検討すべきだと考えた。そうすれば、医者が不在でもある程度の診療を看護師が実施することができ、急変時でも対応ができるようになる。しかし、今日の日本では欧米のようなナースプラクティショナーは認められておらず、研修を受けて特定行為を実施することしかできない。そのため、北山村のようなへき地こそ、地域住民の療養を支えるために、医療的な判断や実施が的確になされるナースプラクティショナーを導入するために制度を整える必要がある。

診療所の医師は2年毎に交代するため、医師に村民の情報を提供するなど、看護師は村民と医師を繋ぐ役割を果たしている。北山村では、月2回カンファレンスがあり、朝の8時～8時半まで医師、看護師、福祉職員、理学療法士、保健師がケアマネージャー、デイサービスの担当者などが集まり、気になる村民の情報共有や今後のアプローチなどを議論する。医師も参加することが特徴であり、医師の視点から教えてもらうことができ勉強になる。

訪問看護を行う中では、村民一人ひとりの性格や生活環境を把握し、信頼関係を築いている。村民の看取りを行うこともあり、エンゼルケアも行う。村民からは、看取ってもらえたことや最期まで良くしてもらえたことがよかったと言われるという。その一方で、お節介になりすぎないように気を付けており、個人的な問題に踏み込みすぎない線引きを大切にしていることがわかった。高齢者は人と触れ合うことが少ないので、治療だけがケアではなく、話を聞くことだけでもケアになるうえに、日頃の話からその人のことを知ることができる。

頼れる親族などがいない村民が他の地区で入院した場合、退院時に看護師が迎えに行くこともある。ただ迎えに行くのではなく、退院後の生活を見据えた支援を行っている。村民は親戚関係

にある人が多く、頼り合いを促すこともあるため、看護職は村民の人間関係や家の配置を把握しておくことが重要である。

北山村のコミュニティは非常に密接であるため、流行病にも注意が必要である。たとえば新型コロナウイルスなどの感染者が発生すると、一瞬にして村全体に感染が広まる可能性がある。そのため発熱した村民に対し、新型コロナウイルスが原因である可能性が低くても、必ず検査を行っている。また、感染者の個人情報を守ることが都市部よりも難しいことも課題の一つである。看護師は村民との信頼関係が非常に重要であるため、看護師自身が感染したり、村民にうつしたりしてはいけないという責任感が感じられた。

#### ・北山村保健師インタビュー

北山村の保健師は2名（2年目、25年目）で、業務および地区を分担して保健活動を実施している。保健活動は、乳幼児健診、乳児家庭全戸訪問事業、健康診断、健康増進ポイント事業「あいべ元気いきいきポイント」、高血圧ゼロのまちプロジェクト、シニアエクササイズ、いきいきサロン、健康相談などを実施している。

保健師としての役割だけではなく、役場職員としての役割も多い。選挙の手伝いやカヌー大会のタイム測定、青年会のメンバーとしておまつりや北山村の非公認ヒーローであるじゃばライダーの手伝いをしたり、クリスマスにサンタクロースの格好で家庭訪問をしたりするなどの活動も行う。保健師は様々な行事を通して村民に定期的に会うことができるため、行った保健師活動のフィードバックを得られるのが良い点である。北山村の保健師は、他の機関との繋がりが強いことも特徴として挙げられる。たとえば、子育てのことであれば毎日直接子どもと関わっている保育士の方が詳しい。そのため、保健師よりも親子との信頼関係が強い保育士から子どもの発達について話をしてもらうことがある。また、診療所から認知症の村民がきちんと薬を飲んでいるか確認してほしいという依頼が来ることもあり、家庭訪問などの対応をしている。

独居の高齢者や老夫婦も多く、支援を拒否されたら他の保健師、または役場など他の職種の信頼されている人が代わりに訪問することもある。その人との相性や好みに合わせた人が担当するなど、業種の枠を超えて支援している。

また、北山村では歯科医師がいないので、高齢者は特に何年も歯科受診していない方が多いように保健師の方は感じているという。そのため、口に合わない入れ歯を使っている高齢者が多いことがわかった。合わない入れ歯を使い続けることによって、吐き気や頭痛などといった症状が起こる場合がある。このような症状によって食欲が低下すると低栄養に陥り、身体機能の低下が発生する。最終的に寝たきりにつながる恐れがある。また、75歳以上の高齢者を対象にしたアンケートでは「半年前に比べて固いものが食べにくくなった」や「お茶や汁物でむせることがある」などの口腔機能に関する項目が県平均よりも高くなっている。これらのことから、北山村では歯周病検診は無料で受けられるよう助成されている。40歳、50歳、60歳、70歳の年齢の方を対象に毎年案内を送り、近くの新宮市・東牟婁地域の医療機関で受診できるよう体制を整えている。対象は15名程度で、受診推奨も保健師が行っているが、受診者は2、3名である。さらに、保育所で園児全員にフッ化物洗口をしてもらったり、生活支援ハウスで毎週1回保健師がオーラルフレイル対策の口腔体操、唾液腺マッサージなどの講習を実施したりするなど予防活動を行っている。

北山村独自の取り組みとして、エンディングフォトがある。北山村で村民が亡くなった際、村役場に写真が残っていないか問い合わせが来ることがあった。しかし、写真が残っていてもかなり古いものだったり、大きく写っていないものだったりすることが多かった。そこで、保健師が

遺影用のエンディングフォトの撮影を企画した。この企画には21人が参加し、村民はお気に入りの服を着用した。美容師やメイクのプロを招き、村民は自分の満足のいく写真を撮影することができた。他にも認知症予防いきいきサロンや小学生に向けた認知症サポーター講座、認知症予防に関連した料理教室の企画なども立ち上げている。

北山村の保健師は2名ということもあり、1年目からこのような保健活動の企画を実施することができ、新しいことにチャレンジできるのが特徴である。プレッシャーや責任はもちろんあるが、保健師が村民のために良いと思ったことを、すぐに実行できるのがへき地で活動する保健師の魅力である。

#### ・乳幼児家庭訪問

家庭訪問に同行し、北山村で未就園の男児を育てる母親にインタビューさせていただいた。

北山村での子育てのいいところは、みんなが子どもに関心を持ち、道ですれ違う人が手を振ってくれたり、声をかけてくれたりするところである。役場に気軽に遊びに行くことができるため、相談がしやすい。保育園に入る前は子どもと二人きりでいることが多いので、保健師に相談することで大人と話す機会があるのが嬉しい。診療所では待ち時間が少なく、子どものワクチンの予約を1年分まとめて取れたり、子どもの健康について気になった時は保健師に気軽に相談できたりするなど子育てに対するサポートが充実している。

デメリットは病院が遠いことや、買い物などどこへ行くにも半日かかってしまうことがあげられる。また、北山村には子どもが少ないのでママ友を作りにくいことや、3歳になるまでは保育園に入ることができないため、職場復帰が難しかったり、母親が一人になる時間を作れなかったりすることである。北山村には高齢者が多いためか、「子どもが男で良かったね」「2人目はいつ？」など、悪気なく配慮に欠けた言葉をかけられることがあることもある。また、近くに用がある際に隣の住民が面倒を見てくれているが、育児の大変さを知っているからこそ頼みにくいこともある。そのため、子育てサービスとして、15分だけでも子どもをみてくれるところがあればいいと話していた。このことから、保健活動として村民を対象に子育てに関する研修を実施し、受講者が有償ボランティアで預かることができるサービスを提供することができれば、安心して気軽に利用できてよいのではないかと考える。

#### ・小学校高血圧健康教室参加

和歌山県によると、平成30年度の収縮期血圧が130mmHg以上の北山村住民の割合は男性65.7%、女性55.9%と、全国平均(男性49.9%、女性43.7%)を大きく上回っている。そのため、外部の講師を招聘し、希望する村民を対象に高血圧教室を行っている。高血圧教室は小学校の調理室で実施し、講義後に実際に調理を行うことで、知識を定着させ自宅でも取り入れやすくするよう工夫が見られた。講義では減塩や野菜の摂取を促し、調理では塩を少量にし、香辛料を増やすなどの指導が行われていた。村民も積極的に質問をしたり、自宅で減塩食を作り続けるにはどうすれば良いか等を考えたりしながら参加していた。

#### ・社会福祉協議会デイサービス

社会福祉法人北山村社会福祉協議会の事業内容は、①地域福祉事業、②介護保険事業等、③生活支援ハウス入居事業を行っている。

##### ①地域福祉事業

地域福祉事業では、村内の80歳以上の方と75歳以上の身体障害者手帳所持者の方への年間に

3回の給食サービスや小学5・6年生を対象に1日デイサービス職員体験などのボランティア活動の推進、中学生を対象とした福祉教育、ふれあいいきいきサロン事業、シニアエクササイズ、公共交通空白地有償運送などを実施している。

## ②介護保険事業等

介護保険事業では訪問依頼のある高齢者宅を訪問し、身体介護（清拭・入浴介助・通院介助）、生活援助（掃除・洗濯・買物）を行う訪問介護事業や、福祉センターでの高齢者の健康チェック、入浴、食事、レクリエーション、日常動作訓練等のサービスを行う通所介護事業(デイサービス事業)などを実施している。

デイサービスは、現在40名の要介護1～4の方が利用されている。大きな街では介護度ごとに曜日や時間を分けてデイサービスを行うことが多い。しかし、北山村では地区ごとの住民の繋がりが強いので、基本的に地区ごとに曜日を分けて行っている。スタッフは管理者・生活相談員1名、看護師1名、通所介護員3名である。流れは送迎(迎え)→健康チェック→創作活動・カラオケ→昼食→入浴(希望者のみ)→レクリエーション→送迎(送り)である。

## ③生活支援ハウス入居事業

生活支援ハウス入居事業では、65歳以上の一人暮らし又は夫婦で、自宅において日常生活に不安な方々が生活支援ハウスで生活することができる。現在は11人入所しており、要支援1～要介護1程度の人が生活している。

### ・社会福祉協議会シニアエクササイズ見学

シニアエクササイズでは、フレイル予防のための運動を行っていた(写真2)。参加者は70代後半の女性の村民が多かった。開始前に参加者が自宅で測定した一週間の血圧を確認するとともに、保健師による血圧測定を行っていた。日常的に血圧を測定することで、参加者の高血圧予防への関心を高めている。エクササイズの内容はダンスや体操、ステップを用いた昇降等がある。参加者同士の会話もあり、終始明るい雰囲気が進められていた。また、理学療法士が参加しているため専門的な視点から実施することができ、フレイル予防や、気軽に質問することのできる環境になっている。理学療法士は足腰の状態が悪くなってしまいう前に予防ケアを実施することを心がけている。理学療法士が予防事業に携われるのが北山村の特徴である。理学療法士から見て、北山村は畑仕事等を日常的にしているからか足腰が元気な人が多く、健康寿命が長い印象があると話していた。年齢が上がっていくにつれて体を動かしにくくなり、迷惑をかけてしまうからとシニアエクササイズを辞めていく人が多いという。辞めてしまうとより動けなくなるので、参加を続けることが大切だということを経験的に伝えていく必要があると考える。



写真2 シニアエクササイズの様子

### ・じゃばらはうす見学

じゃばらハウスは放課後や長期休暇中に、仕事で親が留守にしている子どもたちが集まる場所である。有償ボランティアの大人が1人立ち合い、子どもたちは遊んだり、本を読んだり好きなことをしている。じゃばらハウスには十分な広さがあり、走り回ったり、布製のボールを投げ合ったりしてのびのびと過ごしていた。長期休暇期間には勉強タイムもあり、1時間程度遊ばずに

静かに宿題等を行う時間が設けられている。

じゃばらハウスには図書館も併設されている。子供たちは遊ぶスペースから図書館へ自由に行き来することができる。本は基本的に村民からの寄贈であるが、和歌山県立図書館から貸し出されている本もある。和歌山県立図書館からの本は定期的に入れ替わるため、本を読みつくしてしまった人でも飽きることなく読書を楽しむことができる。

## 6. 考察

### ①北山村の地域特性と子育て世代や高齢者の健康や生活の実態について捉えたこと

北山村では、郵便局の人が配達の手配にガスの見回りや高齢者の様子を観察したり、認知症で迷子になった人をみんなで探したりするなど、地域の連携が強いことがわかった。また、医療・保健職だけが保健活動を行うのではなく、支援が必要な人を地域で見守る体勢ができています。これはへき地で医療・保健職の数が限定されているからという理由だけでなく、住民同士、職種同士の距離が近く、顔見知りの関係にあるため連携がとりやすいのだと考えた。認知症の人がさらに増加していく中で、この連携をさらに強める必要がある。高齢者の健康に関しては、高齢者は喋ることも治療であり、触って欲しい、話を聞いてほしいという思いがある。そのためコロナ渦で非接触が推奨されている中でも、高齢者にはタッチングを効果的に使用し、話をゆっくり聴くことが大切であると感じた。加えて高齢者と乳児や幼児が関わる機会が少ないと感じたため、高齢者でもできる一時預かりや交流の場を作るなど、へき地で人口が少ない分、地域全体で子育てをして助け合いや密接な関わり合いができるように工夫することが必要である。

### ②北山村の地域特性に合わせた保健活動と予防的意義、看護職の役割について

北山村は医療福祉資源に乏しいため、予防対策が重要であることがわかった。特に、歯科医師が身近にいないことで、義歯の調節や口腔内の異常を早期発見、早期治療できない。義歯が合わないことで食欲が低下したり、頭痛や吐き気がしたりするなどの不調が考えられる。そのため、歯科医師がいない中でも、歯周病予防や口腔ケアが充実するように看護師や保健師が健康診査や健康教育などの機会を通じて支援していく必要がある。予防活動を効果的に行うためには住民にその意義を理解してもらい、参加・協力してもらうことが必要である。住民と普段から関わり、信頼関係を構築しておくとともに変化に気づけるようにすることが大切である。

へき地では高齢者が多く、独居の人や認知症の人もある。サービス提供の在り方としては、医療資源が少ないため、まずは病気や怪我をしないことが何よりであり、予防と対策を行うことが一番大切だと考える。また、動ける高齢者にはより長く健康に地域で暮らせるように健康診断の受診や健康教室への参加、ハイリスク者には疾病の予防教室への参加を促し、健康増進への取り組みを住民が主体となって実施することなどが挙げられる。特にシニアエクササイズ教室では参加しない人もいるため、そのような人に対してどのように対応していくのが今後の課題である。また、認知症の予防と、増加していくと考えられる認知症患者に対して、医療職が少ない中でどのように見守りや治療を続けるかが課題である。

へき地の医療職の数は都市部より少ない。ゆえに、看護職は高齢者の見守りをしたり、家族の代わりに付き添いや補助、服薬管理などをしたりと複数の役割を果たしている。また、多職種と密に連携して幅広い援助や切れ目ない支援を行うことが必要である。連携という点で、看護職は多職種連携の橋渡し役となることが重要である。さらに、住民全体に対して正しい情報提供や制度の紹介をすることで、適切な支援に繋げることができる。予防医学の観点から、感染症対策や予防接種などの公衆衛生活動も欠かせない。母子保健領域では、へき地で出生人口が少



ないからこそ、家庭訪問や電話相談を都市部より充実させることができる。一方、一時預かりなど保育サービスや習い事などは子どもの数が少ないため、行政でサービスを充実させることに限界がある。サービス提供の在り方として、今まで通りきめ細かく個々のニーズに応じた子育て支援を地域ぐるみで実施していくことが大切である。

### ③へき地医療を担う診療所の役割機能とへき地医療の課題

へき地では、高度な医療を受けるには限界がある。そのため、へき地の診療所は専門的な医療を受けるべき人が遠隔での診察を受けられるようにするなど中継の役割があると考えられる。また、北山村の高齢者の多くは住み慣れたこの村で住み続けたいと思っているが、要介護状態になると介護できる人がいないため、村から出て他の市町村の施設に入る必要がある。介護が必要な高齢者が最期まで北山村で暮らすことができないことは改善すべき課題の一つであると考えられる。そのため、寝たきり予防などいつまでも元気で北山村で過ごせるための支援、ずっと住み続けたいという気持ちに寄り添った対応がへき地医療では特に求められていると考えた。また、へき地は地理的要因から救急医療を行うことが難しい。医療人材も限られているため、看護師が医師の指示に基づいて特定行為を行うことのできるナースプラクティショナーを導入することでより多くの人を救うことができるのではないかと考えた。

## 7. さいごに

今回の学生自主カリキュラムでは、北山村の診療所の見学・インタビューを通して、へき地の看護師や診療所の実際の役割について知ることができた。北山村での高齢者福祉や子育て支援の実際を知り、北山村の地域特性に合わせた保健活動と予防的意義について学ぶことができた。医療福祉資源が不足する地域で、村民の健康を守るためにどのように子育て支援や高齢者福祉サービスを提供すればよいか検討することができた。

へき地ではどうしても医療職の数が限られるため、看護職は地域全体に働きかけ、さまざまな機関と連携を強めることで、すべての住民の健康と暮らしを地域で支えていく体制を作る役割が大きいことを学んだ。へき地の看護職だけでなく、これからの看護職は医療だけではなく、地域全体を視野に入れて、地域特性をよく分析し、その地域の特徴を活かした保健・看護活動を行うことが重要であると考えた。このような看護職となれるよう、様々な地域に赴いて地域を知るとともに、保健看護学部で深く学んでいきたい。

さいごに、このカリキュラムの実施にあたり協力してくださったすべての方に厚く御礼申し上げます。

## 8. 文献

- ・最新 公衆衛生看護学 第3版 2021年版 総論/2021.2.1/宮崎美砂子ら/日本看護協会出版会
- ・市町村健康見える化シート/和歌山県HP(最終閲覧 2023年1月5日)

[https://www.google.com/url?q=https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/041200/d00211706\\_d/fil/R02\\_29\\_kitayamamura.pdf&sa=D&source=docs&ust=1672921032909218&usg=A0vVaw0qkSX90Wxcvo8sUiq2RtZm](https://www.google.com/url?q=https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/041200/d00211706_d/fil/R02_29_kitayamamura.pdf&sa=D&source=docs&ust=1672921032909218&usg=A0vVaw0qkSX90Wxcvo8sUiq2RtZm)

- ・和歌山県北山村ホームページ | 全国唯一、飛び地の村

<https://www.vill.kitayama.wakayama.jp/>